

事業名称	和紙を未来へ繋ぐ事業			
実行委員会	和紙を未来へ繋ぐ事業実行委員会			
中核館	安部榮四郎記念館			
	住所	〒690-2102 島根県松江市八雲町東岩坂 1754		
	TEL	0852-54-1745	FAX	0852-54-1745
	ホームページ	<a href="https://izumomingeishi.com/abeeishirou/">https://izumomingeishi.com/abeeishirou/</a>		
構成団体	八雲中央公民館 松江工業高等専門学校			
事業開始時点の課題分析	<p>2年目となるこの事業は、前年度に引き続き課題に向けたさらなる歩みを進める。</p> <p>中核館となる安部榮四郎記念館は、出雲民芸紙の伝承・周知を含め、日本の伝統工芸「手すき和紙」の普及活動という大きな使命がある。また当記念館が和紙の博物館として中心になり、2016年に全国の手漉き和紙生産者の調査を実施した「全国手すき和紙生産者アンケート調査」の結果によって、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①生産者の著しい減少</li> <li>②国産の原料不足（トロロアオイなど含む）</li> <li>③道具生産者減少</li> <li>④和紙需要の減少</li> <li>⑤後継者不足</li> </ul> <p>以上の問題が明確になった。この問題は、日本の伝統工芸が抱える共通した課題でもある。何一つ欠けても成り立たない伝統工芸は、近年特に不安定な状況にある。その中でどのように未来に向けて継承していくかを実践する。そして伝統工芸製作の根底の諸問題を解決しなければ、日本の伝統工芸は無くなっていくことが予想されるため、安部榮四郎記念館は行動力で現状解決に踏み出している。当記念館の和紙の専門的知識と、これまでの地域住民との共働する力により、課題の解決と未来へ繋ぐ新たな伝承を試みる。</p>			
事業目的	<p>手漉き和紙が地域の伝統文化として伝承できるよう、新たな試みに挑戦する。松江市八雲公民館を通して地域住民や、松江市以外にも広く周知し官民共同で三稜・トロロアオイの栽培方法の試験を継続。また和紙の特長を活かした活用法を提案し、手すき和紙が暮らしでも利用できるよう体験プログラムの開発をする。</p> <p>そして、松江工業高等専門学校と共同し、和紙を漉く時の人と道具（簀桁）の動きをデータ化し、科学的根拠の解明をもとに、これを後継者育成に活用する。また技術のデータの記録と共に、文化財においても将来手漉き和紙が必要になるその時、必ず復元できるよう正確かつ精密に記載した和紙製法レシピ本を、永久保存できる手漉き和紙で製作し公開する。</p> <p>さらに重要な役割として、経年変化を測定するための和紙に関する生産者アンケートを実施する。激減する生産者の定点観測は、前回（2016年実施）との変化を把握し、当時調査不足であった生産者漏れを補い、手漉き和紙と機械漉き和紙を区別化する。ま</p>			

	<p>た、今回初めて全国手漉き和紙用具製作技術保存会も含めて生産者同士の連携を構築する。手すき和紙生産者に必要とされる原料などの情報を引き続き調査し、手すき和紙の定かでない定義を確立する。2年間の試験栽培、和紙の活用法は、技術データとともに和紙製法レシピ本に記録し、生産者アンケートの集計と報告書及び生産者名簿とともに3年目（令和4年度）に完成を目指す。</p>
<p>事業概要</p>	<p>①前年度から引き続き、地域住民及び松江市内外からの参加者による原料生産に向けた構成人数を強化し、三椏とトロロアオイの試験栽培をするとともに栽培の担い手も育成する。種・挿し木・現存の三椏から苗の採取等すべてを試験栽培。地域活性化、休耕田の活用、森林の保全を含む。また、和紙の特長を活かした工芸や暮らしで活用できる技（障子張り）などワークショップに取り入れる。このワークショップの内容には、体験プログラム「和紙製作の全工程を学ぶ」を含むため参加は少人数で組む。ここで行う栽培方法や和紙製作工程は②の和紙を作るレシピ本に活用する。活動は随時WEB公開する。</p> <p>②松江工業高等専門学校による和紙生産環境調査と経験豊富な職人(安部信一郎—島根県無形文化財指定・雁皮紙)の技術をデータ化し、その技術の後継者育成（現時点で1名）に活用する。出雲民芸紙の独特の動きは、安部榮四郎が確立したもので特徴がある。前回ではコロナ禍のため学校再開が遅れたため出来なかったが、今回は被験者を後継者とし動きを分析する。伝承するためには、動きや温度・光など環境により違いが出る。それらの要素も同時に記録する。そして何より和紙を作るすべてを記録する必要があるため、今使用する紙漉き用具全般も記録し、広範囲による知識を科学的根拠とともに記載し、手漉き和紙抄造技術の和紙レシピ本として製作する資料とする。</p> <p>③後継者不足のため激減する和紙生産者の調査は経年変化の測定のため重要な位置付けにある。前回のアンケートで後継者不足が半数だったため、5年毎に行うのが適当であると判断し本年度はアンケート調査を実施する。正確な情報を得るため、手漉き和紙と機械漉き和紙について区分化し、手漉き和紙用具製作技術保存会も参加しアンケートを実施集計する。</p>
<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p><b>和紙を未来へ繋ぐ活動</b></p> <p><b>(1) 地域と連携した三椏・トロロアオイの栽培と和紙を活かした工芸開発</b></p> <p>①栽培研修と体験プログラム検討会議の開催</p> <p>②用地の実地調査と栽培研修会</p> <p>③参加者募集</p> <p>④参加体験プログラムの実施</p> <p>⑤栽培研修と体験プログラム冊子作製とホームページで公開</p> <p><b>(2) 出雲民芸紙抄造技術記録と和紙のレシピ本製作</b></p> <p>①データ記録年間スケジュール検討会議の開催</p> <p>②和紙のレシピ本製作内容検討会議の開催</p> <p>③和紙製法レシピ本内容記録作業開始</p> <p>④データによる後継者育成の開始と記録</p> <p>⑤技術記録データ成果報告 ホームページで公開</p>

	<p>⑥和紙レシピ本内容成果報告作成</p> <p><b>(3) 和紙生産者、用具生産者アンケート調査</b></p> <p>①2021年実施アンケート調査検討会議</p> <p>②和紙生産者・用具生産者アンケートの予備調査</p> <p>③アンケート調査の実施</p> <p>④回収後の集計と回収作業（聞き取り調査を含む）</p> <p>⑤集計速報報告と検討会議 集計結果はホームページで公開</p>
<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>2年目となる手漉き和紙を未来へ繋ぐ事業は、次のような成果と効果があった。</p> <p style="text-align: right;">①</p> <p><b>手漉き和紙全般が抱える原材料不足の解決</b>へ三椏とトロロアオイの試験栽培及び和紙の周知を目的に「体験プログラム」を4回開催し原料（雁皮）の準備から抄紙工程・紙漉きを体験、また生活に結び付く和紙工芸の体験を行い約50名の参加があり好評だった。コロナウィルス感染対策のため人数制限はあったが、講演会や石州半紙とのコラボレーションで漉き比べをライブ配信し来館をしなくても視聴でき情報発信出来た。試験栽培については地域の方に聞き取り調査を行い、情報を沢山得ることが出来た。その結果経験者から指導も受け成功率を7割と上げることができ栽培担当にとって大きな成果を得た。また、作業補助員や参加者がSNSやFacebookなどで広く情報発信した効果は、和紙に関心が向き募集以上の参加希望があった。今後安部榮四郎記念館でのワークショップに応用できる体験となり、入館者の2割増加を期待できる成果をあげた。</p> <p><b>「体験プログラム」の実施</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回・10月30日 石州和紙の講演と石州和紙と出雲民芸紙の漉き比べ18名参加</li> <li>・第2回11月6日・第3回11月7日・第4回11月13日に開催 雁皮の煮熟から紙漉きまで体験と同時に暮らしに役立つ障子張り、だるま作り、雁皮紙に墨で描くなどワークショップを開催し各10名～15名参加</li> </ul> <p>② <b>和紙レシピ本の製作準備</b>として①で得た2年間の栽培方法や三椏・雁皮の抄紙工程、紙漉き用具のまとめが出来た。後世で和紙が必ず作れるように考えたもので、具体的な経験を掲載し、松江工業高等専門学校と共同し職人の漉く技術と環境もデータ化し掲載する。準備中で数値にはできないが、このレシピ本は貴重な記録となり後継者育成に役立つ成果となる。また、今年度は松江市内と近隣から和紙原料の雁皮の黒皮の提供と情報があり、聞き取り調査と分布調査を行った。</p> <p>③<b>手漉き和紙生産者アンケート調査を実施</b>した。5年ごとに経年変化の観測として行っているが、日本国内の和紙生産者の実態がつかめる国内唯一の調査である。約200件の集計結果を前回（2016年）との比較も図表化し速報値として生産者に配布、活動報告書にも掲載した。詳しい分析の報告と生産者名簿は次年度刊行する予定である。</p> <p style="text-align: right;">この①～③の</p> <p><b>活動は誰でも閲覧できるよう【和紙を未来へつなぐ】としてすべてホームページにおいてWeb公開</b>している。世界からも見ることが可能なため、日本の伝統工芸の紹介にもなり、今後国内国外からの来館者の回復・増加も期待できる。コロナ禍で年間1,000人の海外からの観光客がゼロとなりダメージが大きかったが、この機会に手漉き和紙の継承方法等を考え栽培研修も含め実行する時間を持てた。成果として、和紙のあるべき本来の原点に戻り、地域性の特徴を持つ和紙の個性を生かすため、地域でトロロアオイや三椏の栽培・三椏・雁皮の分布調査を住民の方々と行うことが出来たことがあげられる。</p>

	<p>この活動の情報が広まったことで、地域住民との結びつきが強くなりさらなる協力が期待できる。「地域の力」－「人の力」が将来伝統文化の継承を実現する可能性を得たことはこの活動の一番の成果である。</p>
--	---

## 【事業実績】

※作成要領に従い事業実績は2頁で作成ください。

## 事業実績 和紙を未来へ繋ぐ活動...和紙の未来Ⅱ

### (1) 地域と連携した三椏・トロロアオイの栽培と和紙を活かした工芸開発

#### ① トロロアオイと三椏栽培研修会

トロロアオイの栽培2年目となり昨年の経験をもとに手入れがしやすい近くの畑を借り、5月種まきから10月根の収穫まで頻りに手入れを行った。夏の草取りは大変だが近いため数名で根気よく手入れした。特に根を太らせる摘花は毎日のように行った。結果昨年度より大きく長い根を収穫できた。(写真①②)



①



②

三椏の栽培は、種まき、挿し木、苗の移植の3種類を実験した。昨年度収穫し土中に埋めた実から種を出す前に発芽。6月に畑とプランターに蒔いた。2年間の試験栽培で種が確実に発芽し大きく伸び、3月6日県内の栽培農家から採取した苗も元気に花を咲かせた。挿し木も伸びは悪いがほぼ芽を出し現在小さな花がついている。(写真③④)



③



④

#### ② 参加型体験プログラムの実施

##### VOL 1. 第1部 講演「石州和紙の現状と将来に思うこと」

講師：石州半紙技術者会 会長 西田 誠吉

##### 第2部 石州半紙と出雲民芸紙の漉き比べ(参加者紙漉き体験含む)

講師：石州和紙 川平 正男 出雲民芸紙 安部信一郎

参加者：18名



⑤

コロナ禍のため参加者は少なかったが、ライブ配信等工夫した。島根県は手漉き和紙が10件あり中でも石州半紙は国の指定を受けている。出雲民芸紙の雁皮紙と石州和紙の実際の漉き方の違いや紙質の違いを比較するため参加者に体験してもらった。



⑥

雁皮の紙料造りの準備...採取から70年以上たった雁皮の黒皮を30センチくらいに切る。切った雁皮の皮は水をためた甕につけた。(写真⑤⑥)

**参加者の感想** 石州半紙のお話で現状とこれからの明快に知ることが出来ました。経済的發展の中で収入が高まり、効率の悪い仕事が無くなっていく。和紙の原料作りもその一つなのでしょう。その中で突破口を見つけて行動されることを期待します。



⑦

##### VOL 2. 和紙の王様・雁皮紙を作る3日間と和紙で楽しむ体験ものづくり

11月6日 雁皮黒皮の煮熟とくらしに役立つ障子張り...参加者10名

障子張り指導：元紙漉き職人 安部喜久雄

雁皮の紙料造りの2回目は、1週間甕の水に漬けた黒皮を取り出し沸騰した大釜の中に入れた。出雲民芸紙の雁皮紙の特徴は黒皮と一緒に煮るとこにある。2時間以上煮ると皮は柔らかくなる。その後取り出し灰汁抜きのため1晩中湧き出る地下水の中に入れておく。



⑧

煮熟の間に障子張りを体験した。前日、古い障子紙をはがし、枠をきれいに掃除、乾燥させた。近年障子のない家もあり、昔のように1年に1度新年を迎えるときはりかえることもなくなった。地元の方に昔の話を聞きながら楽しく障子を張り替えた。(写真⑦⑧)

**参加者の感想** 和紙でも雁皮、楮、三椏の種類があることや特製など初めて知りました。やはり見ているだけでも落ち着いた気分になれるので、部屋の障子を和紙で貼ってみたいと思いました。ぜひ本日習ったことを家でもやってみようと思います!!ありがとうございました。



⑨

11月7日 雁皮の塵よりと願いを込めて和紙だるま作り...参加者10名

だるま作り指導：だるま職人 堀江 努

1晩流水に漬けて灰汁の抜けた雁皮の大まかなごみを取りながら1回目の塵よりをし、手漉き和紙伝習所へ持ち帰りたらいに入れて2回目の塵よりをしました。本来は5回くらい塵よりが必要ですが、時間的なこともあり和紙だるまにとりかかりました。色とりどりの出雲民芸紙を講師が丁寧に丸く手でちぎったものを参加者は40数枚選び水糊でだるまの型に貼っていきます。和紙を乾燥させてから顔を書き仕上げます。一人ずつ個性が出るだるまが出来ました。(写真⑨⑩)



⑩



**参加者の感想** ダルマが幸運をもたらしてくれますように！何でも効率を求められる世の中で、昔ながらの手作業の仕事、道具を作る人たちが少なくなるのは悲しいことだと思います。職人の仕事は、季節を感じられる素晴らしい仕事だと思います。



⑪

11月13日 日本伝統の流し漉きで雁皮の紙漉き体験と雁皮に墨で描く...参加者13名  
紙漉き指導：出雲民芸紙工房職人

講演と墨で描く自由表現 講師：路上詩人こ一た

午前中に紙料にした雁皮で本格的な流し漉きを体験した。雁皮は漉きにくく厚みを出すことが難しいので職人が手伝ってA3判の紙を漉いた。乾燥する間に、講師こ一た氏が実際に描きながらパフォーマンスを交えた講演会を開催した。今回は墨汁ではなく硯で墨を擦り自分の漉いた雁皮紙に1文字を描くというテーマでした。墨を擦ることが初めての方が多く、日本在住の海外の方も参加し楽しんでいました。(写真⑪⑫)



⑫

**参加者の感想** 島根大学（国際センター）で働いていますが、絶対この体験は、留学生さんが喜ぶと思います。今日は初めて筆を持ち墨に触りました。とても新鮮で楽しくて、日本の昔ながらの文化を感じて本当に嬉しかったです。忘れられない貴重な体験を提供していただいて感謝しています。こちらに来るのは2回目ですが、また来たい！！と思っています。

③ 12月25日 栽培研修検討会議の開催

今年度のトロロアオイと三椏の栽培結果を検証した。

土の成分や育成条件等を調べて来年度の課題を話し合った。

④ 栽培研修・体験プログラム成果冊子の作成とホームページで公開  
活動記録は随時ホームページで公開した。

URL <https://www.handmadewashi.com/blog>



⑬



⑭

(2) 出雲民芸紙抄造技術記録と和紙のレシピ本製作

① 技術のデータ記録開始 被験者：出雲民芸紙後継者 山野孝弘

今年度は、これまで計測した熟練した職人のデータと職人歴の短い被験者の技術を計測し比較しながら熟練した職人のデータをもとにアドバイスし、上達の度合いを調べた。年間5月から始め10月まで5回計測した。

② 和紙原料の雁皮の分布調査及び聞き取り調査 8月・11月

雁皮は貴重な原料で、成長が遅く30年から50年山で自生しているものを使う。

八雲町の雁皮を取っていた方の話を聞き、自生している場所をしらべた。

また雲南市加茂町の中林さんは、昔採取していた方で、今の実際に自生している情報があり山を案内してもらい確認した。

11月松江市の福井さんより今まで採取した大量の雁皮の黒皮の提供があった。情報の聞き取り調査も行った。

近隣で山に自生していることが確認できた。貴重な原料確保となった。(写真⑬⑭⑮)

③ 12月23日 技術記録データ成果について松江工業高等専門学校と検討会議開催(写真⑯)

今年度の測定結果を検証した。

④ 技術記録データ成果報告 PDFにしてホームページで公開

⑤ 和紙レシピ本内容成果報告 紙漉き用具の写真と計測図・使用方法のまとめをPDF公開



⑮



⑯

(3) 和紙生産者、用具生産者アンケート調査

① 2021年度第2回全国手漉き和紙生産者・用具生産者アンケートの実施

5年ごとに経年変化の観測として行っているが、日本国内の和紙生産者の実態がつかめる国内唯一の調査である。約200件の集計結果を前回(2016年)との比較も図表化し速報値として生産者に配布、活動報告書にも掲載した。(写真⑯)

② アンケート集計速報報告をホームページで公開

(1)(2)(3)の活動記録、技術記録、和紙生産者アンケート調査集計結果は以下のホームページで公開している。  
和紙を未来へつなぐ URL <https://www.handmadewashi.com/>

安部榮四郎記念館ホームページからも閲覧可能

URL <https://izumomingeishi.com/abeeishirou/>